

東京女子大学旧体育館解体工事着工に抗議する

1. 趣旨

文化財的価値のみならず、高い活用可能性をもつ東京女子大学の「旧体育館」の解体が、学内外からの保存の強い要望を無視し、解体の必要性についての合理的な説明もなく、今週にも強行されようとしている。

我々は、本年4月17日に「東京女子大学旧体育館保存のための緊急アピール」を提出した。その後、4月29日・5月11日・5月20日の3回にわたり、それぞれ新たな賛同者を加えて再提出したが、大学からは現在までまったく回答がない。公的教育機関であり文化財保存について社会的責任のある東京女子大学のこうした姿勢に強く抗議し、以下のことを要望する。

2. 要望

- (1) 保存できない理由を明らかにし、緊急アピールに対して誠実に回答してほしい。それまで「旧体育館」解体工事の停止を求める。
- (2) 解体／保存の如何に関わらず、今後の建築物・建築史学的研究のために、構造その他に関する詳細な学術調査の実施の許可を求める。

3. 要望の根拠

(1) 体育兼社交館の文化的価値と活用可能性

- アントニン・レーモンド設計の「旧体育館」(1924年建造)は、建築史上および日本の女子高等教育史上、文化財としての価値が高い、重要文化財級の建物である。
- 「旧体育館」は単なる体育館ではなく、舞台、暖炉付の5部屋をも有する多目的ホール(クラブハウス)であり、さまざまな活用の可能性を秘めている。このような建物の保存・活用は、東京女子大学を一層魅力あるものにし、経営戦略上も有益である。

(2) 解体不可避の理由のあいまいさと大学側の対応

- 大学側は、解体不可避の主な理由として、①防災上の問題、②耐震性の問題、③財政的制約をあげているが、いずれについても具体的な説明がない。そればかりか、関連情報(耐震診断報告書、維持・改修費用見積もりなど)の学内者への開示も拒んでいると聞く。
- 大学の建物は、寄付や学納金によって建造・維持されており、現時点でたまたま決定権を有する一部の人たちの私的所有物ではない。大学にはこのような貴重な文化財を保存する社会的責任がある。
- それにもかかわらず、大学側は、学内外(学生、教職員、同窓生、建築家、学者・文化人、市民)からの真摯な要望に応えることなく解体を強行しようとしている。